

「CADL」がケアマネジメントを変える！

現場実践編

現場でのCADL実践を深める「現場実践編」。
1人の利用者さんの事例をもとに連載3回を1クールとして、
CADLを活用したケアマネジメントの変化を追っていきます。



前回は、「意欲・動機づけシート」を活用することで、Aさんの「やる気スイッチ」が見えてきたこと、そして「まとまり課題」として整理していく過程について紹介しました。

今回は、CADL視点を取り入れることで、実際にケアプランがどのように変化していったのかをみていきます。



CADLとは？ 文化的日常生活活動・行為 (Cultural activities of daily living) のこと。ICF (国際生活機能分類) に依拠し、参加・活動を含む日常生活で行う本人の「文化的な生活活動・行為及び要素」をいう。「自分らしさ」を尊重した「生きて在ることへの肯定」を、理論的に支えることを目指す。高室しげゆき氏が提唱。

施設実践 第3回

CADL視点で変わるケアプラン

Beforeのケアプラン (CADL活用前)

CADLを学ぶ前のケアプランでは、「転倒しない」「排便コントロールを行う」「身体機能を維持する」「安全に移動する」など、「できないこと」や「阻害要因」に着目した内容が中心となっていました。その結果、利用者及び家族の意向欄には「穏やかに暮らしたい」「不安なく過ごしてほしい」という、多くの人に共通する漠然とした表現にとどまっています。

CADL視点で再アセスメントする

CADL視点では、「できないこと」だけでなく、「その人がどんな生活を望んでいるのか」「何に喜びや意味を感じているのか」を整理していきます。本事例では、「意欲・動機づけシート」を用いて再アセスメントを行いました。その結果、お花を生けること、書道をすること、作品を見てもらうこと、季節を感じる、人と交流することが、Aさんの生活意欲につながっていることが見えてきました。

「まとまり課題」から考える

本事例では、複数の課題を統合し、本人の意欲をゴールに据えた「まとまり課題」として以下のように整理しました。

利用者情報 老人保健施設より特別養護老人ホームに入所。90代前半の女性。要介護4の認定。脳梗塞で左半身まひがある。移動は車椅子を自走し、移乗はつかまり立ちにて可能。食事や整容は概ね自立しており、排泄もトイレで行えているが一部介助を要する。末梢性めまい症の既往があり、体調の変動や便秘傾向がみられる。認知機能は保たれ意思疎通はできるが、表情が乏しく周囲との交流もあまりない。日課のお参りや趣味の園芸は継続している。



奥田亜由子 <https://caretown.com/>

ケアタウン総合研究所 代表 日本ケアマネジメント学会 理事
主任介護支援専門員、認定ケアマネジャー、社会福祉士
長年、現場のソーシャルワークやケアマネジメントに従事。愛知県介護支援専門員協会理事等を歴任し、ケアマネジャーの育成・指導に携わる。CADLの提唱者である高室成幸氏と共に、CADL普及推進委員会として「CADLハンドブック-第1集- CADLと「らしさ」〜本人支援の「新しい視座」(環境新聞社)」を発行。著書はほかに、「目標指向型」介護予防ケアプラン記載事例集」(共著・日総研出版)など多数。

図1 CADLを学ぶ前の第1・2表の抜粋

第1表

利用者及び家族の生活に対する意向を踏まえた課題分析の結果	本人：穏やかに暮らしたい
	家族：不安なく過ごしてほしい

第2表

長期目標	短期目標	援助内容
体調維持、現在の身体機能を維持できる	自分でトイレまで移動できる	PT指導によりリハビリ、生活の中で行える活動を提供
		車イスの自操ができるように環境整備を行う
	移動や立位時、見守り。必要に応じて介助する	
排便コントロールができる		体調を整えるため1200cc程の水分提供
		腸内環境を整える乳製品などを提供

お花・書道を中心にした「まとまり課題」

好きなお花や書道を続けて作品を家族や同じ入所者の方や職員に見てもらい、季節を感じながら楽しい時間を過ごしたい



お花の作品を披露して笑顔

びとなり、一体感が生まれていくでしょう。

まとめ

CADL視点でアセスメントからケアプランを作成することで、「何のために支援するのか」という目的が明確になりました。

ケアプランの視点が変わる

立位訓練や移動支援は、「転倒しないため」だけでなく、「お花教室へ参加するため」「作品を飾りに行くため」という意味を持つようになります。水分摂取や体調管理についても、「健康管理」そのものが目的ではなく、「好きな活動を継続するための支援」として位置づけ直されることになります。つまり、CADL視点では「機能維持」が目的ではなく、「本人が望む生活を続けるための支援」として、ADLや健康管理を位置づけ直していくことができるのです。その結果、ケアプランは「管理するための計画」から「本人らしい暮らしを支える計画」へと変化していきま

施設生活を「生活」として支える

CADL視点では、施設生活を「生活の終着点」としてではなく、「本人らしい生活を再構築する場」として捉えていきます。ケアマネジャーは、「できないこと」だけを見るのではなく、「その人がどんな時に笑顔になるのか」「何をしている時に生き生きしているのか」を丁寧に言語化し、ケアプランへ反映していくことができます。

CADL視点を取り入れることで、ケアプランは「できないことを管理する計画」から、「本人らしい暮らしを支える計画」へと変化していきま

「機能維持」が目的ではなく、「本人が望む生活を続けるための支援」へと転換していくことがケアプランから見えてきます(図1→図2)。

そうすることによって、ケアプランは「管理するための計画」から「本人らしい暮らしを支える計画」へと変わり、多職種で「やる気スイッチ」を共有することで、チームに一体感が生まれることになり、チームアプローチが実現していきます。特別養護老人ホームでも本人の望む暮らしが実現することがわかります。住環境や食生活などの健康面の支援のもとより、ていねいなアセスメントにより、本人らしい生活を送ることができるのです。

図2 CADLを学んだ後の第1・2表の抜粋

第1表

利用者の意向	好きな牡丹や芍薬のような華やかなお花や書道を通じて作品を家族や同じ入所者の方や職員に見てもらい、季節を感じながら楽しい時間を過ごしたい。生け花教室や書道教室に参加して、作品を家族や職員に見てもらいたい。外出や買い物にも行きたい。
家族の意向	本人がやりたいことがこれからも出来るように協力していきたい。外出や外食等、可能であれば行ってほしい。行事ごとには一緒に参加します。
総合的な援助の方針	<ul style="list-style-type: none"> 毎月のお花教室や書道教室に参加し、作った作品を施設内に飾り、ご家族や職員・来訪者に見てもらうことで本人の生きがい作りを支援します。 好きな物（移動販売）を利用し買い物ができるよう、またなじみの職員・仲の良い利用者さんと一緒に過ごせるよう支援します。 外出や散歩ができるように、機能訓練や生活の中のリハビリを継続して行えるよう健康面も気を付けていきたいと思います。

第2表

長期目標	短期目標	援助内容（サービス内容）
買い物や生け花や書道などの教室活動、家族との交流を続けながら、自分らしい楽しみのある毎日継続する。	外出や散歩に向けて、日常生活の中で無理のない機能訓練を継続し、外に出る機会を持つことができる。	<ul style="list-style-type: none"> 理学療法士による指導を受け、立位訓練や歩行訓練を行う。 車イスの自操ができるよう環境整備や見守り声掛けを行う。 体調や天候を見ながら、施設周辺の散歩や外出機会を検討する。
	生け花教室や書道教室に月1回以上参加し、作った作品を家族や職員に見てもらえることができる。	<ul style="list-style-type: none"> 毎月の教室開催日に声かけを行い参加を促す。 完成した作品は施設内に展示し、家族・職員へ共有。 「きれいですね」「上手ですね」の声かけを多職種で共有する。

事例提供者に聞くCADL効果

柴田康敬 ● 社会福祉法人昭徳会 特別養護老人ホーム小原安立 介護員兼施設ケアマネジャー



本事例を通して最も大きく感じたCADLの効果は、「できないこと」の管理やリスク中心の視点から、「ご本人が何を大切に、どのような暮らしを望んでいるのか」という視点へ、ケアマネジメントの軸そのものが変化したことです。これまでは、転倒予防や身体機能の維持など、安全や健康管理の目標が中心でした。しかしそれは、安全を優先するあまり「生活の画一化」という「施設の罫」に陥っていたのかもしれない。今回、CADLの視点で再アセスメントを行い、これまでの人生や「本人らしさ」を丁寧に紐解いていくことで、生け花や書道を続け、作った作品を人に見てもらい喜びといった「ワクワクする意欲」こそが、生活の原動力だと明確に気づかされました。

その結果、リハビリや日々の体調管理も「機能維持のため」だけではなく、「大好きな生け花を続け、家族や周りの人に見せるため」という、ご本人の目標を叶える手段へと意味付けが大きく変わりました。この「やる気スイッチ」を介護職や看護師など多職種で共有できたことで、チーム

全体が「何のために支援するのか」を共通認識し、ご本人中心で動く強い一体感が生まれました。24時間の介護力と多職種連携という施設の強みがあるからこそ、ご本人の「願いや希望」にチームで寄り添い、支えることができたと感じています。

このような支援を続ける中で、ご本人の表情や生活にプラスの変化が生まれていくのを間近で実感できました。その変容は私たち職員にとっても大きな励みであり、ケアが単なる「作業」から「人生を支える支援」へと大きく進化していきました。

特別養護老人ホームは、機能低下への対応に追われ、ご本人の希望が見えにくくなりがちです。しかし、施設を「生活の終着点」ではなく「生活を再構築する場」と捉え直すことで、心身に制限があっても物語は輝き続けます。今後もCADLを活用し「何ができないか」ではなく「どのように生きたいか」に寄り添う支援を、現場の仲間と共に創り続けていきたいです。